源氏物語

三

源氏外伝考之二

紅葉頃

まひのこゝろをたゝひなんとて御のたまはるこのゝ
なかめをかの春の御のおのゝたまはけるうた
ゆきをたゝしらなるものゝ
たゝしらなたちなみ　ゆきの　ちはい　体歴
しこのなかひなかれはなとも　ちやうみ　風流
なるものいさきなの　やうなる　なるこ　みまひ

文庫

ころころばかりなくしは雅情のおもき所に名を
うつし農夫に称と称て半は地下の
宗匠あらそひのしのこともはやく家の作め
二条家下りて此年の内貞徳はやく御許の後は
なりとて世上の人々貞徳のひとと
宗祇宗鑑守武なとおほしかりて京東西
のみならず流ものゝ作と云さりしものゝとあり日し
宗鑑より此後にては作あるへし名利流
貞徳地下の道つきて上手あまたも出来

貞徳の弟子貞徳の作より和歌の道にも優
なり其中の風の作は此の流れこれ
るゝこともなくは作よ作は文段の句もつきめて
ところしきりに家元して作らして今の風を
うつしたる貞徳に弟子人多くありて其作のうちに上手
せられしも宗因家にかゝはることを好まぬ人々
多くの人作りつきて世上かなりけれ又家々
出作にありても門人をもよみ出したる初作も
出来て此道を立てゝ今家元と名のりぬ

[illegible]

[illegible]

なまじひにしらん所作にて綺語をつくりて仏法に
くらうなりしへ婬事を旨とのせしこそかれか
しかのみならす綺語を飾りしてしらぬ人にすゝめ
まして婬事はいふにおよはすなりし綺語にたるき
うゐふかゝりし水雲の所へて婬事とは云ふ
色欲心のおこりに信仰うしなへるのことをいふとき
出離縁とて沙門となりて大きにきこゆる
のこゝろときこゆるうしてせ仏のうたへのとは
たゝいと恩愛すくよりもよろこひすれなし

こなたにひかるゝ人のこゝろを感しさせ
とのかな
いみしくしりくるにこそ行や佛菩薩の代か陸頼似
のかなしむ
世隆頼とともにさるへき御心ふかくて手引給
よきことさと世のなかなにとふなりしを ほ
ならぬとつまいつて出家しそれのよき御心をこゝに
はなちはなたす仏のなほしたまへむかし たれ人も
つれなく みなよき 御心ざし ことある男女の

道理正行くる清水ちくとらめ此久兵白清り
てらさきりやあることの
あし他のゆし希なる
仏氏は学者の論説を子細に不信其人を
々のこゝの学ぶ其説の果報に是其の系縁を
さ行大に任代のめくりも家子の善恩ゆりき
と思ふ人は道行に報果なきことに一代
久すること其行とも一男の中に兄弟は福是福
注の理を善人ある善人なり福あり

なりともる人なれとも福のうく思人に福ある
ことの多きは先祖父母の恩と先祖父母の徳行を
兄弟に盛し福の室めくくる絡のうつされ
子孫の善人なるの事なし子孫の是あり先祖
の恩ふかくありての善事ありて福となりて是
先祖の恩徳なしとて兄弟に盛し福の室家
めくくる絡の中には子孫の恩いまて福めく
は其善行の家さかえてゆく必ず家はさか
こゝにりやうの道理経験の三世に似る仏家

平素は臨兄と申ものなれは三艸子かよいさん
としころを親族といひ申へし
四十つ年迄のやむことなきみのたまはりし縁
ありふく
其のち此書の夫は実に京にかへりて人々しら
こはたゝかふ人は何かゝる 今生以後うつしても
あらまし此書ふとは言くとの 序にて 末の作
しきゐしもされとも 此度細き写せる ところあ
もうけられ あくとのまして 其書の やさしき

序詞との御くみの上に 臨兄ふもつしの
ハ他にもろくくれてもよろしく 三書ふ大やうなる
ハ此書の後に 夫のたかくもあくしくはなれ
しかるに書と他のふく あら京にてゆかしくまな
時人なりしは 他のさうなふはなれり給く
三まもしくなる事とのを
去やらのむとく
追而 前申よろしく 冷泉もゆるしま
しもしも申候 のきしゆくれ 見候も 宝寿人

今もさかりなき なふ南年も 郡宮のなひあらそ
人まつやこそふ扇見 まもる 御ゆかり今は
山守はつよく見渉の見るらく 人もよそく成
ふるき寺も 人の勝ふ なくなるふ有しぞれ
それもむかしの有きれ 流しやすく人をそこ
なすする 見え見人有し 今の有りしさなかに流し
うく人とうこ なすみすな ふし
桜とみれ あとうさしも 衣あしいひ給けん
のへさそとも

近しく春くの いそぎには さしそへて 夫とく
今もあそに ならぬきとのこ 男も女も 下ちく
列てはほとり あるとのこ 源氏のとしりうくさ携
をかし そささぬ やまふしの ものいわすれれ
若上て よらふるすれて はる行し歴ての ひとあ
ろそもまふはなる 人はあれ よろうの下らうこ
婚りの はつらひあしくて 妻の 様は そうやれ
突見るまの 有る田けしくなるらとのこ 妻の女
行くるも はかりし そら そえ人と見れは ふかね

まのやうなるにわかれ妻といふものをしらぬは
よのつねしきやなるにあらすとかく夫の事
り済時
江衛門殿よりのうけしは木のこまかに
宮ら紋に有し琴を表したる紀に皆はなれはとも
られしに江衛門女房も相生の更衣とに
りしのへて又右近よりあたり右近ゆかりに
とも又のこりけるへきへはこそきかれん人の
き弥才の利とおもへて月清の年也

ゆうのことは
箏と琴とをいへるは深くゆゑ伏羲氏五
十絃の琴を作りしが中古二つにわけて二十五絃となれり
然れとも五絃の琴ありけるは七絃琴三絃同し
事を黄帝の時より琴をつくりしは十三絃の琴
はしとして秦の始皇の時蒙恬といふ人又二つにわけ
して十三絃とし五十絃十三絃十二絃と見え
申し候古は人の心すなほにて今の人は心
やうやう二つに分かれ然るに今琴をかきて七絃を

甲乙 其也八音 風音にこそりりて甲乙になれ
又二ツの二十七孔にて 本孔 文人の手振ふ
あひさりにて 十三孔とて 第の十三孔自然に
何国のおもふおもんみ 一六二七三八 四九五十之二
孝の山みえて 尊神もあり々 めでの称名に
ひつき久形とて いやへの治まるまつる
のちの御にみち行て 五人とて又も二ふきます
ハちゝつきまでに 孝の手も降りわけて 図
久保ゝをもてきとりて 比しやりかへて

うしめ書附 御の手へまゐりし 子細を
云ひへかへて うきねりせをしのせられ御ても
今のよしなれとも しのあふりよ云ひつゝ
又、出ながらたえて もりしきまの事とも いきさて
きたせすもとへ名ともしうきなれ位出一之
上手の位なれてこそ
昨しかりてゆしれゆすつき
中を左手と 左の手 瑞と 抜て 出こ 律の手へ
三々六八斗 中ハ 無き 九ゝて 近り 花とも 梅の方

[illegible]

花妻

[illegible]

天子人の国をおさむるへきやうは　天子御心得
天下の徳様を天のまこと言行と人よこそ
成らるゝ天命の因生をもつハ天とみえる
なけれハのやうのかより　天子御の祖宗もましく
天地之のくはしめれなれり　又祖宗の盛徳を
かくありゆくすまもねり　天ふ名君の徳おかし
すゑとらへの時よきあらわれて　後の世と
天下く道こる仁帝の法　一らもみては　君位長久
なき天下法盛　深我起りしめて王威ゆるさん

かられやうなれとも　一気一文の取りハ深れれと
みやうのみよりはしられり　天和の年ちゅこそ　やそ
皇氷いふりしらうさし　后妃ちらえおし
独りしねりみそこの事の代まれ　へてとみえし　盛と
りみともれ　天然ちゅ三種の神器と帝王の御
きりしこうちあれおりしとや　難くし神おきて法
一とみけてハてりはうしるひのまつりさき　萬義なり
らそて万年三ちあのすもりとも　三つそ大臣
の王威ゆかしるらむし　その万り　大臣奉るまれ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

治承はこてくらゐへりれて皇のしれ
多の身ねならくれ風なありし末代の服
ここうへりれ
ましこちれ春秋の御さへりしこくもれ
おりしまんうれのうへやひとなき人あらく
ふのしけ
むかしは花とすふ文字ねうくふ字形あいたる
みしこまたしるへの名をしらる道としく臣の
遠ばたてゆるる大形の細すれまく今は都人

なかゐみなりく今年の多きふ安んしなるし
さしはいうる所々の先れをきふ人々とふ弟石
せうでしくまへ人にゐ位となりくれてもえとも
歳みへうつまく人はもしつけとふなれい加りしき
すこ
○春寒なさしくまりせうふのこまいふるみ
のりくくうそのこふ神くて少なひまが
かうしきこうりまたい
春寒の御みをなんて兼経なりなくもなる御し

さて左京亮俊はのちの名 出家してのちはかれい
兼昌朝臣 猶以今ひとかしきするふさき
のまへ知らしめし
三位中将そのかれしてはなを 柳花苑といふ名
をうれいたり 三位中将へ源氏の秘ぞうの名をさへ
まつらせ申やうまゐまゐ 世に又あるへし いそぎてとて
父しく兼昌朝臣 めつらうよしきこゆる 名の人は 秋定信
のかりしみえうるまつさまいさ
三位かのさまくの はうか朝臣のうちうちおくまいらする

さやかに
蓮上のはうふく 蓮上の母は よろしくはね
柳の御使にはなくふかく 蓮上に物かたらせある
此事えしの女方一家の伝法をも 伝へ申て
かぞくおくふかくて 左手の人の入へきやうもな
なし 伝授の父右大臣 そうかう はなちくやくるは
かゆしきすらぬのほくやうすきしくい たそれ
さらにこそり 伝授をそらし たる人 子息は女房
おもしろし うくへきうち いれとも 弟何ひとつ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一[illegible]の少ふあるを[illegible]

[illegible]

[illegible]人[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

の四方の法華の[illegible]の[illegible]毎の人たち[illegible]
[illegible]きるまれ[illegible]や[illegible]しき[illegible]
[illegible]ても[illegible]房[illegible]の[illegible]と[illegible]ば
[illegible]
[illegible]ふれ[illegible]人の[illegible]なり
[illegible]

蓋上のこなりに毋[illegible]を[illegible]ふ[illegible]
[illegible]
[illegible]の人も[illegible]人の四隅のやうにみる

[illegible]の人ゆゆしくて[illegible]
[illegible]
[illegible]の蓋上方法[illegible]
[illegible]
[illegible]又[illegible]の[illegible]
[illegible]蓋上二人の[illegible]
[illegible]ぬ人の[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

人の[illegible]ものを[illegible]

[illegible]

○たき市の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

しらぬ人も此ぬしの
書とゝめたるうつくしき
なれとも行ふなりけさ
なりいとしきものゝ
こゝろ書とするものゝ
ゆくゑのこゝろ
うれかなきよりはれ
すゝ川やうの所
ありけるを
うゝうきてうきうの人
なりのそすしく

めきうれふねれを
うゝ なりを